第 22・23 回講道館日本語教育ボランティア実施報告
～世界の柔道コーチの皆さんとの双方向的な言語文化教育活動～

斎藤孝滋　岩沢亜紀　福沢涼栞　石本桃子

Ⅰ．概要

1. 講道館日本語教育ボランティアとは

斎藤　孝滋

日本発祥の「柔道」（正式名称：日本伝講道館柔道）は、スポーツ全種目においてはサッカーに次ぐ世界第 2 位、格闘技系競技においては第 1 位の競技人口を誇る世界文化です。本企画は、世界各国から柔道の総本山「公益財団法人講道館」に指導者研修の為に訪れた柔道コーチの皆さんにご協力いただき、一日都内観光の場をお借りし実施する双方的な言語文化教育活動の一環としての日本語教育活動です。

活動では､フェリス生が各国柔道コーチのみなさんに日本語を教えるのみにとどまらず､反対にフェリス生が柔道コーチの皆さんから母語や様々な文化を教わる形式で行います。まさに、世界の柔道コーチの皆さんとの双方的な言語文化教育活動なのです。

また、本企画は、2003 年開始以来、既に 40ヶ国以上の柔道コーチにご参加いただき、フェリス生の参加学生も全学部全学科に及びます。

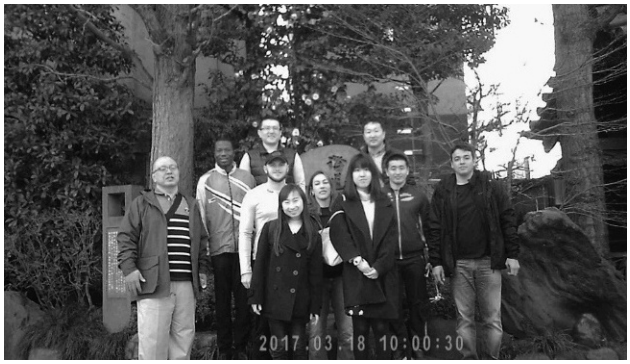
第 22 回（2017 年 3 月 18 日）・第 23 回（2018 年 3 月 17 日）ともに、講道館国際部課長大辻広文先生のご引率のもと、第 22 回は、ジンバブエ、キルギス、モンゴル、ブラジル、第 23 回は、カザフスタン、キルギス、イタリア、オーストラリアの柔道コーチ、フェリスからは、文学部コミュニケーション学科 2 年生岩沢亜紀、福沢涼栞、第 23 回は文学部コミュニケーション学科 4 年石本桃子（共に本学文学部教授　斎藤孝滋引率）が参加し、実施されました。なお、第 23 回に際しては、講道館から水野泰晴先生（青年海外協力隊マダガスカル OB ＆講道館国際セミナー・アシスタント）もご参加くださり、サポートして下さいました。

移動ルートは、講道館→永昌寺（講道館発祥の地）→浅草→増上寺→東京タワーです。

第 22 回　出発前　講道館正面玄関の嘉納治五郎師範像前にて

第 23 回　出発前
講道館正面玄関の嘉納治五郎師範像前にて

※写真左の左から 1 人目、写真右の右から 1 人目は、ご引率の講道館国際部課長大辻広文先生
写真左の前列右から 1 人目が福沢、2 人目が岩沢、写真右の左から 5 人目が石本、右から 2 人目が斎藤



第 22 回　永昌寺の講道館発祥の碑前にて

第 23 回　永昌寺ご本尊の前で、和尚様をお囲みして

※永昌寺和尚様は、お忙しい中、院内をご案内下さり、講道館ゆかりのエピソードをお教え下さいました。

2. 双方向的な言語文化教育活動

活動は、行く先々で、柔道コーチの皆さんにポラロイドカメラで興味あるものを撮影していただき、その写真の説明を、ポラロイド写真の余白に、フェリス生が日本語（ローマ字と平仮名）で、コーチの皆さんがそれぞれの母語（の文字）で記し、相互にその表現を学びあうというものです。

また、昼食も重要な双方的文化教育活動の場です。話題は、箸の使い方、浅草で購入したお土産の話題等から始まり、様々な文化圏の多様な文化についてどんどん展開してゆくので、まさに多文化交流の絶好の機会でもあります。

浅草寺にて（第 22 回）

雷門にて（第 23 回）

※後列左から 1 人目が大辻広文先生、前列左から 2 人目が水野泰晴先生

浅草寺の金龍の舞を間近でご覧になるマーシャ先生〈ブラジル〉（第 22 回）

昼食時のテーブルで、料理を待つ間、エルキン先生〈キルギス〉が浅草で購入された達磨落に交替で挑戦する先生方とフェリス生。写真はエルキン先生の挑戦風景（第 22 回）

増上寺にて（第 22 回）

増上寺にて（第 23 回）

3. 対照言語教育教材の作成

最終見学場所の東京タワーでは自由時間の合間に対照言語教育教材を作成します。ポラロイドカメラの余白に記した日本語と柔道コーチの母語の表現を、前者はフェリス生が発音し、後者は柔道コーチご本人に発音して頂く様子を収録し、ネイティブによる対照言語教育教材（画像音声教材）を作成するのです。

第 22 回は、ショナ語と日本語、キルギス語と日本語、ポルトガル語と日本語、モンゴル語と日本語、第 23 回は、カザフ語と日本語、キルギス語と日本語、イタリア語と日本語、英語と日本語の貴重かつ生き生きとした対照言語教育教材を作成することができました。

3.1. 対照言語教育教材作成風景

対照言語教育教材作成 1 文字記入風景
（第 23 回）

対照言語教育教材作成 2　発音収録風景
イビッツァ先生〈オーストラリア〉の収録時、（第 23 回右が石本、左下の IC レコーダーで音声を収録させて頂いているのが斎藤。）

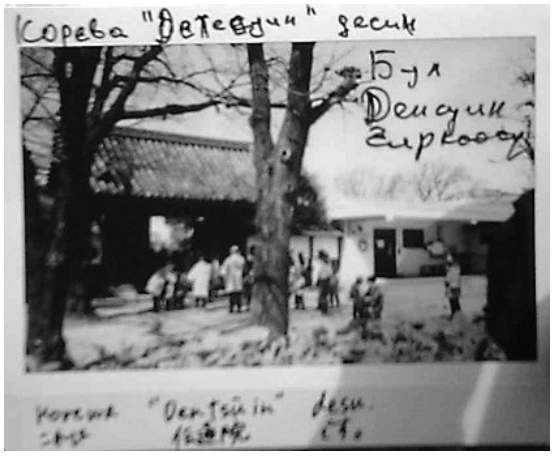
対照言語教育教材作成 3　収録を終え完成
教材の素材としたポラロイド写真は撮影・発音収録語撮影した先生方に差し上げている。マーシャ先生と左手にポラロイド写真をお持ちになるジエゴ先生〈ブラジル〉（第 22 回　左から 1 人目が岩沢、3 人目が福沢）

3.2. 対照言語教育用材例

第 22 回作成「対照言語教育教材例」

ショナ語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
※ここではショナ語表現の後に日本語の desu を加えて下さっている。
（ショナ語表記発音協力：スマート先生〈ジンバブエ〉）

ショナ語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（ショナ語表記発音協力：フィリップ先生〈ジンバブエ〉）



キルギス語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（キルギス語表記発音協力：マラット先生〈キルギス〉）

キルギス語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（キルギス語表記発音協力：エルキン先生〈キルギス〉）

ポルトガル語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（ポルトガル語表記発音協力：ジエゴ先生〈ブラジル〉）

ポルトガル語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（ポルトガル語表記発音協力：マーシャ先生、ジエゴ先生〈ブラジル〉）

モンゴル語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（モンゴル語表記発音協力：ゲンデン先生〈モンゴル〉）

第 23 回作成「対照言語教育教材例」

カザフ語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（カザフ語表記発音協力：イッサ先生・ゾォマール先生）

イタリア語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（イタリア語表記発音協力：モーリッソ先生〈イタリア〉）

キルギス語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（キルギス語表記発音協力:アイカンシュ先生〈キルギス〉）

キルギス語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（キルギス語表記発音協力:アデリベック先生〈キルギス〉）

英語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（英語表記発音協力：アンバー先生〈オーストラリア〉）

英語（上段）と日本語（下段）の対照言語教育教材例
（英語表記発音協力：イビッツァ先生〈オーストラリア〉）

4. 今後へ向けて

参加学生には、講道館日本語教育ボランティアの双方向的な言語文化教育活動で得られたノウハウや問題意識をさらに高め、社会貢献へとつなげていくことが期待されます。

また、作成した対照言語教育教材も、様々な導入教育活動で使用させていただく予定です。（なお、ポラロイド写真本体は、撮影された柔道コーチの皆さんに記念としてお渡ししております）。

今後とも、講道館の先生方、世界の柔道コーチの皆様のご協力をいただきながら、楽しく充実した双方的な言語文化教育体験の場として実施できれば、幸甚に存じます。

Ⅱ．参加学生報告

第 22 回講道館ボランティア参加報告 1

岩沢　亜紀

私は、今までボランティアの経験が無く日本語を教えるということで、最初はとても不安でしたが、柔道家の先生方の素晴らしいお人柄で不安がなくなりました。乏しいながらも持っている語学力と身振り手ぶりで何とかコミュニケーションを取る事が出来ました。

3 月 18 日お天気がとても良く、最初に講道館で打ち合わせをし入り口で記念撮影をし、講道館柔道発祥地である永昌寺、浅草寺、増上寺、東京タワーを巡りました。私自身も浅草に行ったことが無かったため、柔道家の先生方と一緒に観光しているような気分でした。浅草寺では金龍の舞を見ることが出来ました。柔道家の先生に「お参りの仕方を教えて」と言われ、お参りの仕方を説明していて、私たちは普段何気なく行っていることにも、文化違いを実感しました。

昼食の時には先生方とだるま落としをして遊び、とても楽しかったです。

最後に東京タワーに行くのですが、女性の先生が東京タワーのキャラクターの缶バッチを東京タワーの方に頂き、私達とお揃いにして着けていらっしゃったことがとてもいい思い出になりました。

また、東京タワーや浅草寺で先生方に撮って頂いた写真に、先生方はご自身の母語を、私達は日本語を写真に書きこみました。書いた言葉を先生方に発話して頂き、ボイスレコーダーに録音をするのですが、普段では聞くことが出来ない言語ばかりでとても勉強になりました。同じ意味であっても文字や言葉の違いを改めて感じました。

とても印象に残っているのが、先生方の意欲的に学ぶ姿勢でした。普段私たちは日常的になり過ぎていて気が付かない場所などに「これは何ですか。」と積極的に質問している姿にとても刺激を受けました。私は中々質問を積極的に出来る方では無いため、今後の学生生活また、大学卒業後の今後の人生においても興味を持つ事や学ぶ事に対する姿勢の大切さを考えさせられました。

また、本来私達が日本の文化を教える企画でしたが、むしろ私たちの方が色々教えていただきました。先生たちの母語での「お母さん」「お父さん」「ありがとう」などにあたる言葉を教えて頂いたりと学ぶべきところが沢山ありました。

今回の経験を通して感じたことは、勿論語学力がある事には越したことはないですが、大切な事は、相手に伝えようとする気持ちがとても大切だということです。例え言葉が通じなかったとしても伝えようと思う事が大切だと思います。また、受け取る側も相手の気持ちを受け取ろうとする気持ちが大切だと思いました。

普段あまり中々コミュニケーションする機会がない柔道家の先生方と交流する事が出来、とても貴重な経験をすることが出来ました。私は、あまりボランティア活動に積極的な方では無いため、このような機会がなければ一生経験する事はなかったと思います。このような素敵な機会を作っていただいた事に感謝したいと思います。また、機会がありましたら是非また参加させて頂きたいと思います。本当にありがとうございました。

第 22 回講道館ボランティア参加報告 2

福沢　涼栞

ボランティアに参加するまでは、自分のつたない言葉が果たして海外の方々に伝わるのだろうかとても心配でしたが、柔道家の方々はとても優しくて「笑顔で接すること」ですぐに打ち解けることができました。今回のボランティアでは、日本語や日本文化を教えることを主な目的として行いましたが、言葉とともにジェスチャーをつけて伝えることによって、しっかりと理解してもらえました。また、私もそれぞれの国の母語や文化を教えていただき、発音の難しさや、その国独特の面白い習慣を知ることができました。電車の移動中や道を歩いているときにも、お互いの母語を教えあい、覚えたての言葉を使いながら話をすることができたことはとても楽しかったです。

よくジェスチャーは大事と言われますが、実際に使ってみて非言語コミュニケーションのもつ力の素晴らしさを実感しました。柔道家の方は初めて見るものに出会うと「これはなんですか？」と私に質問をしてくださったので、言葉を交わす機会がたくさんできました。理解していただけた時には、本当にうれしかったです。柔道家の方も「なるほど！」という感じで清々しい顔をしていました。こんな経験は普段はなかなかできないことなので自分の財産となっています。また質問されて改めて日本の文化や伝統を考えることができて、海外にはない日本の良さに気付くこともできました。浅草のおみこしは私自身も初めて見て、そこに出てくる白浪五人男という存在も初めて知ったので自分にとっても日本をさらに知る良い機会になりました。

文化の差などによって言葉だけでは伝わらないかもしれないと勝手に思っていましたが、それは勝手な先入観でした。たとえお互いに伝わらない部分があったとしても、笑顔でゆっくりと教えあうことによって伝わることが何度もありました。コミュニケーションは言語だけで取るものではないのだと実感することができ、「表情」がいかに大事なのかということを身に染みて感じました。歌手の高橋優さんの「福笑い」という歌の歌詞にもあるように、本当に世界の共通言語は『英語』ではなく『笑顔』なのだなと思いました。

面白かったことは、集合写真を撮るときにも柔道用語が使えることです。「そのまま」というと「そのまま」の姿勢でポーズを取ってくださり、いい写真が取れたら「一本！」と言うと「ありがとう！」と返してくれました。柔道用語も学べて良かったです。

柔道家の方々に『興味を持ったものをポラロイドカメラで撮っていただいて、その写真の説明を私たちが日本語で書き、柔道家の方にもそれぞれの母語で説明文を書いてもらう』という体験もしましたが、キルギスの発音やジンバブエの発音は特に複雑で難しかった印象があります。これも普段は中々できないことなので、経験できてうれしかったです。

講道館ボランティアに参加して、相手が海外の人でも物怖じせず話かけてみるという度胸がつきました。言葉が伝わらなかったら怖いなと思わずに積極的にコミュニケーションをとっていくことの大切さを学ぶことができました。

昼食ではお刺身やおみそ汁などの日本食を食べましたが、柔道家の方々は生の魚に少し驚かれていました。またデザートには抹茶かバニラのアイスがありましたが、抹茶に見慣れていないため、ほとんどの方がバニラを注文していて面白かったです。注文を待っている間は、お土産に買っていただるま落としをして楽しんでいて、よい雰囲気でご飯を待つことができました。私たちもやらせていただいて、ここでも仲が深まりました。

ボランティアに参加したことで自分のコミュニケーションの取り方をより良いものにするためにはどうすれば良いのかを考えるきっかけになり、課題も見つけられたので本当に有意義な体験になりました。この体験を今後にもいかしていこうと思います。

第 23 回講道館ボランティア参加報告

石本　桃子

「わっ、虫！」、「無視してないです！」これは、柔道コーチとの会話の中で起きた一場面です。紙に平仮名で書くと同じ言葉でも、アクセントによって違う意味をもつ言葉が、日本語には沢山あることを改めて感じた瞬間でした。

第 23 回は、柔道コーチ 7 名と講道館国際部課長大辻広文先生、水野泰晴先生、そして斎藤孝滋先生と私の計 11 名で実施されました。日本語を教えるということが目的でしたが、まずは心の距離を縮めることからはじめました。7 名のコーチ全員に楽しんでほしい！日本っていい国だなって思って帰ってほしい！そう思ったので、一人一人の関心が何処にあるのかを見つけることにしました。例えば、コンビニがある度にアイスクリームを買って来ていたコーチには、日本語でアイスクリームの種類を教えてアイスクリームしりとりをして楽しみました。また、風鈴を見つめていたコーチには「揺れているものを美しく感じますか？」と聞くと笑顔で頷いてくださったので、揺れているもの探しゲームをして笑い合いました。次第にコーチの方々が「ももー！こっち来てー！これ何？」と楽しく話しかけてくださるようになって、とても嬉しかったです。どのコーチにも共通して関心が高かったものは、やっぱり、柔道です。講道館発祥の地である永昌寺では、畳や木の柱を前のめりになって撫でている姿を見て、柔道に対する熱い想いを感じました。

講道館、永昌寺、浅草、増上寺、東京タワーを巡る中で、日本の文化とその日の思い出がぎゅっと詰まった写真を沢山撮りました。撮影した写真ごとに「これは日本のお米です。（Kore wa nihon no okome de su .）」と日本語とローマ字で記載して、コーチの方に発音していただきました。そのあと、コーチの方の母国語で記載していただいて、私がその国の言葉で発音をしました。それをボイスレコーダーに録音することで、自分の国の言葉を教え、相手の国の言葉も教えてもらいました。

私たち日本人が普段何気なく使う言葉は、他国の方に疑問を感じさせてしまうことがあります。例えば食事の際に「箸を取っていただけますか？」と掛けた言葉が、他国の人には「橋をどうやって取るんだろう…」と違う意味として捉えられてしまうこともあります。だからこそ「箸」なのか「橋」なのか、小さなアクセントの違いですが、正しい日本語を話すことが大切だと学びました。私は現在、言葉を仕事にするための勉強を続けています。これから先、他国の方が日本を訪れる機会が増えてくる中で、日本人だけでなく、日本に居る外国人にも伝わりやすい言葉を届けられる人になりたいです。

今回、参加学生として斎藤先生からお声掛けをいただけましたことを嬉しく思います。

また機会がありましたら、参加させていただきたいです。有難うございました。

謝辞：講道館館長上村春樹先生、国際部長藤田真郎先生はじめ国際部の先生方、ご引率賜った講道館国際部課長大辻広文先生、また第 23 回において、ご多忙の中、ご高配くださった永昌寺和尚様、活動においてサポートくださった水野泰晴先生に深く感謝申し上げます。

そして、ご協力くださった、柔道コーチの皆様に感謝申し上げます。